

---

## 批評と紹介

---

B. ルイス著

中東の人種と奴隷,

M. ゴードン著

アラブ世界の奴隷制

清水 和 裕

### 1. はじめに

イスラム世界における奴隷制度は、従来あまり研究者の中心的な関心とはならなかった分野である。これは、近代奴隷問題の微妙な政治的背景や、歴史研究一般、特に旧来のマルクス主義史観において奴隷研究が特殊なテーマとして論争を呼んできたこと、そして西アジア史においては奴隷研究が主にマムルーク研究を中心として行われてきたことなどの理由による。しかし、例えばマムルーク研究の基盤としては奴隷制に対する検討を避けて通ることはできない。イスラム社会全般の、より深い理解のために奴隷制度研究の前進が不可欠であると言える。

近年、この問題に関してバーナード・ルイスとマレー・ゴードンにより相次いで新たな研究が刊行された。両者は共にイスラム世界における奴隷、特に黒人奴隷に大きな関心を払っており、この点で共通する問題意識を持った著作である。そこで、この両書を紹介し、かつ若干の比較検討を加えるものとする。

### 2. 構成と内容

#### ① Bernard Lewis, RACE AND SLAVERY IN THE MIDDLE EAST.

本書は元来「a group project on tolerance and intolerance in human societies」の成果として二十年前に執筆された前著 RACE AND COLOR IN ISLAM, (New York, 1971) の内容を引き継いだものである。ここではイスラム世界における人種偏見問題を大きな柱としつつ、同時に奴隷制度全般に検討を加えており、最終的には人種偏見と奴隷制度を総合的に理解する試みがなされている。特に従来の奴隷研究で看過されがちであった黒人奴隷の在り方に重点が置かれている点は注目に値しよう。しかし、前著に対する佐藤次高氏の「ムスリムの護教主義を知らない読者には誤解を

与えかねない」(『マムルーク』東大出版会、一九九一年、一九一頁、註四)という批判は本書に対しても有効である。

本文の構成は、1. Slavery, 2. Race, 3. Islam in Arabia, 4. Prejudice and Piety, Literature and Law, 5. Conquest and Enslavement, 6. Ventures in Ethnology, 7. The Discovery of Africa, 8. In Black and White, 9. Slaves in Arms, 10. The Nineteenth Century and After, 11. Abolition, 12. Equality and Marriage, 13. Image and Stereotype, 14. Myth and Realityであり、さらに若干の史料断片の英訳が Documents として付される。

著者の一貫した目的は、イスラム世界に人種偏見は存在しないという「西欧の信仰」を打破することであり、このため著者はイスラム世界においても人種偏見が存在したことを様々な史料を用いて証明し、同時にその形成と発展について論じている。

彼によればアラブ・イスラム帝国以前のすべての古代帝国は地方的なものに過ぎず、例えばローマ帝国ですらその本質は地中海社会にすぎない。これらの古代社会においては人種間の区別は「現在我々が言うところのエスニック集団 an ethnic group」の区別として認識されていた。一方、「race」という用語はもっぱら white, black, Mongolian, その他というような大きな区別を示すために使用され、もはや国家的、エスニック集团的、文化的実体に適用されることはない」のであり、このような racial な区別はイスラムの成立以前には存在しなかった。

これに対してイスラムは初めて、南欧、中央アフリカ、インド、中国にわたる本質的に世界的な文明をつくりだした。また大征服によって征服者と被征服者の区別が生じ、さらに巡礼に代表されるようなイスラムに独特の要素によって個人の移動性が高まった結果、人種間の接触が頻繁となり、不可抗力的に人種問題が形成されたとする。すなわち「古代アラビアもしくは古代の他のどの地域においても、現代的な意味での racism は知られていなかった。新たな、そして時に不道德な、racial 対立という様式はイスラム世界の内部において現れたことは明らかである」という。このように著者は racial な区別の発生をイスラムの成立と結び付け、これによってイスラムにも人種偏見が存在したという彼の主張を理論化する。そして、大征服以降のイスラム世界の文学、地理書、また実用書などに人種偏見の存在が見られることを広範な史料によって実証的に明らかにするのである。

しかし、これらの主張には大きな疑問を感じざるを得ない。まず本当にイスラム以前の文明に彼が言うところの racial な問題が存在しなかった

かについて、著者が挙げる実証例がなぜ ethnic な区別の例であって racial な区別ではないと言えるのか、あまり説得力が感じられない。またこれらの文明が①地方的なものであり、②内部の移動性が低く、③人間間の接触が起こらない状況であったという主張に関しては、その根拠すら示されてはいない。さらに著者は、無明時代の黒人混血の詩人 Antara に対する差別の例のごとく自分に不都合な事例は、後世の racial な態度が史料に反映された結果であるとし、ジャーヒズの黒人擁論を単なるレトリックであると解するなど、恣意的な史料解釈を行っている印象が強い。結局彼が成功しているのは、イスラム世界にも人種偏見が存在したという、自明の理を実証することのみである。

さて、本書後半はイスラム世界における黒人奴隷の在り方と奴隷貿易について取り扱う。ここで著者が大きな関心を払っているのは、前半で示されたような人種偏見の状況のなかで、黒人奴隷を中心とした黒人が現実にもどのような状況下にあったかである。これを明らかにするため、著者は近世を中心とする黒人の奴隷化に際する奴隷狩りと奴隷貿易の諸問題、黒人奴隷兵や黒人宦官等を検討し、さらに奴隷制廃止の経緯について述べる。特にここで重要な指摘は、多数の黒人ムスリムが奴隷狩りの犠牲となっていた事実であろう。

またいわゆる奴隷軍人に関してもルイスは黒人奴隷軍人を中心に据えている。従来の奴隷軍人研究は一般にマムルークと呼称される白人奴隷軍人を中心に扱ってきたが、現実にはここに示されているように、多数の黒人奴隷が軍人として使用されているわけであり、これらの事例をも視野に納めなければ包括的な奴隷軍人研究は不可能である。その点で本書や佐藤次高『マムルーク』における黒人奴隷兵に対する関心は重要である。

奴隷貿易に関してはゴードンの著作に詳しいが、奴隷貿易を巡る国際環境や奴隷貿易網そのものの盛衰といったイスラム社会をとりまく状況の分析に力点を置くゴードンに対して、ルイスの関心はあくまでイスラム社会内部に受け入れられた後の黒人奴隷に関心を寄せており好対照をなしている。この結果彼は人種偏見の存在を強調する一方で、イスラム社会の奴隷制度については自立的な社会制度として、安易な批判を行ってはいない。

最後に以上の分析を踏まえつつ再び黒人に対する人種偏見が黒人奴隷の存在とあいまって、結婚の上での障壁、またステレオタイプや社会イメージの形成といった問題を創りあげたことを指摘する。そしてイスラム社会に人種偏見が存在しないという俗説を否定して結論とするのである。

## ② Murray Gordon, SLAVERY IN THE ARAB WORLD

筆者は中東・アフリカの経済社会問題の専門家でありニューヨーク市大その他北米の大学で教鞭を採り、オーストラリア外交アカデミーの助教授を勤めている。本書の目的は、従来欧米の学者による研究が少なかったアラブ世界の奴隷制度の検討を行うことであるという。しかし、一読すれば明瞭であるように著者の関心はあくまでアフリカに存在し、アフリカ在住民、黒人がいかにイスラム世界の奴隷制度のために抑圧され従属的な立場にあったかを示すことにその全力が注がれている。

本書の構成は、1. Slavery Concealed in the Mist of Time, 2. The Attitude of Islam Toward Slavery, 3. Occupation and Status of Slaves in the Islamic World, 4. Sex and Slavery in the Arab World, 5. Early Muslim Traffic in Slaves, 6. Slavery on the Frontiers of Araby : 1500-1800 , 7. Heyday of the Slave Trade : 1800-1900, 8. Slavery in All Its Forms, 以上の8章である。

このうち第1章から4章の前半部はアラブ世界内部における奴隷や奴隷制度の実態、イスラムの奴隷制度認識等が扱われ、第5章以降の後半部で、アフリカを中心とする地域での奴隷交易網の形成や奴隷狩りの問題、そして奴隷制度廃止に至る状況の検討が行われている。本書のもっとも独自性の強い部分はこの後半部であり、イスラム世界と非イスラム世界の接点である辺境地域においていかにして奴隷が生産され、イスラム世界内部に送り込まれていったか、またその交易網がいかなる状態にあったかを考察した試みは評価に値する。惜しむらくは筆者がもっぱら欧文文献のみを用いたため必ずしも実証的に満足できるものではなく、おそらくより詳細な検討が可能であろうと思われる点であり、また論全体にモラリスト的な筆者の姿勢が影を投げ掛けている点であろう。

奴隷貿易網に関しては、筆者はサハラ砂漠を縦断する貿易網とアフリカ大陸東海岸を中心に展開された貿易網を中心に論じている。すなわち、中央アフリカからサハラ砂漠を経由して北アフリカにいたり地中海からトルコ、エジプトへと黒人奴隷を運搬するルートの形成と盛衰に着目しつつ、より重要なルートとして東海岸からインド洋、ペルシア湾岸にいたる海洋貿易網の存在を強調し、このルートを事実上支配したオマーン・アラブの政治状況と奴隷貿易の発展について叙述を試みる。前者はマグレブの繁栄、後者はインド洋交易の発達にともない、それぞれの交易路に組み込まれることによって、奴隷貿易もまた隆盛へ向かったとされる。

同時にこれらの奴隷貿易網の末端では盛んな奴隷狩りが行われ、多数の黒人ムスリムがその他の支配者自身の手によって奴隷として集められ、商品として出荷され、出荷港への苛酷な移動の後、各地で売買された様子が

指摘される。その際強調されるのは、イスラム世界の辺境に位置するがゆえに、奴隷生産地として奴隷貿易網に組み込まれていったアフリカ黒人世界の悲惨さであり、奴隷貿易の非道徳性である。ここにもモラリストとしての著者の姿勢を明確に読み取ることができる。

そして、18世紀以降アフリカにおいても商品作物の導入によるプランテーション農業の成立とそれに伴う、より体系的な奴隷獲得が進行したことを指摘し、西欧の奴隷廃止論者の「努力」の結果イスラム各国が奴隷制廃止に踏み切る過程をオスマン朝やエジプトなど各国ごとに詳述する。

このような後半部に対して、前半部には筆者の様々な問題点が一気に露呈する感がある。

筆者はここでルイスが試みたのと同様に、イスラム世界内部における一般的な奴隷像を提示し、イスラム世界において奴隷がいかなる立場にあり、それをイスラム法がどのように支えてきたか、また軍事奴隷、家内奴隷、妻妾、宦官等としての奴隷の機能と社会的な地位等を検討する。

しかし、多彩な原語史料を駆使し、多くの業績を挙げてきたルイスと異なり、ゴードンは基本的には欧文文献のみを用い、そのアラブやイスラムに関する知識も非常に浅薄なもののように思われる。本来地域の呼称にすぎないイフリキーヤ ifriqiya を国家名と誤解し、10から11世紀にかけてそのような国家が存在したかのごとき記述をなすのはその一例にすぎない。また元来アラブやイスラム等の用語を使用する際には、研究者の慎重な態度が求められる。単にアラブといっても、各時代、地域、社会によってその意味するものは様々である。しかし、著者はこのようなアラブ、イスラムといった言葉を極めて超時代的、地域的に使用する。この結果、19世紀の奴隷貿易を論ずる際に8世紀アッバース朝の事例をもって裏付けとし、またアラブは誇り高く独立心が強いいため家内労働を奴隷に任せたとするような無意味な考察をするのである。

さらに本書の最大の問題点は、こういった著者のアラブ、イスラム認識と彼のモラリスト的な立場に由来する。著者は奴隷制度を非人間的として批判するに急なあまり、そのような奴隷制度を正当化したイスラム法そのものを批判的に捉えている。著者によれば、イスラム法が奴隷制度を正当化したために、イスラム世界では奴隷制度廃止論が現れず、支配者も奴隷制度の保護に腐心した。また欧米の「努力」によって奴隷制度の廃止が進められた際にも抵抗が大きかった。イスラム法が奴隷の解放を奨励したために常に新しい奴隷の流入が必要となり、奴隷貿易網の発展を促した。またアフリカ内部に改宗イスラム化が進行することによって奴隷容認の姿勢が強まり、奴隷交易が進展した。ゴードンにとってはイスラム化の進行と

は奴隷制の拡大と容認に他ならず、この結果としてスーダンのマフディー運動すら奴隷制復活を意図したものと理解されるのである。

このような著作姿勢は、本書の随所に一定の偏りをもたらしめている。例えばルイスは官官作成の際、去勢手術の死亡率を史料に基づいて2%とするが、ゴードンはこれを、おそらく90%程度が妥当であろうとする。ここには歴史的な社会状況を見逃して、去勢手術を非人道的とのみ評価する著者の姿勢が微妙に影を落としているといえよう。同様に、奴隷制度廃止に関して欧米諸国のとった帝国主義的な圧力も、彼には欧米による努力として好意的に評価されているのである。

以上のような本書前半部の記述が、西アジア史として、イスラム社会研究として、そして学術研究として大きな問題を抱えていることは明らかであろう。

### 3. ま と め

ルイス、ゴードン両者の著作に共通する関心として、従来あまり注意の払われなかった黒人奴隷の重視、また彼らがイスラム社会に連れてこられる際の奴隷貿易網と奴隷狩りの実態への注目という二点が挙げられる。

イスラムの奴隷制度を語る場合、その制度が新大陸の奴隷制度とあまりに異なるがために、その制度面にのみ注意が向けられることが多かった。特に、家内奴隷が主体であったこと、解放が奨励され、福祉面でも注意を払われ、身分的な偏見が少なかったこと、主人との個人的な結びつきが重視され、時に社会的に高位に昇ることがあり権力を得ることも稀でなかったこと等、いわば社会に完全に定着し成熟した制度としての奴隷制は、多くの研究者の注目を集めてきた。

しかし、その一方でこのようなイスラム社会に流入する奴隷が、イスラム世界との接点にあたる辺境の地域でいかに生産されてきたかを明らかにした研究はほとんど存在しない。内部での自由人の奴隷化を否定したイスラム世界にとって、奴隷がいかに獲得され、生産されるかは、ほぼ無視されてきた。奴隷は外部のブラックボックスのうちより現れ、そして彼らのもとに到達するのである。このような霧に包まれた外の世界状況を、内部の奴隷制度の在り方と関連させながら論じ、奴隷狩りや奴隷貿易網の形成、発展を検討した両書は、奴隷制研究に大きな視点を提示したと言えるだろう。この視点は同時に、イスラム世界と外部世界の接触、そして前者による後者の貿易網への積極的な組み込みがどのようにおこなわれ、どのような問題をもたらしただかを考察する際に重要なものとなるであろう。また、黒人奴隷の実態を積極的に取り上げたことも、今後奴隷制度全体を包

括的に考察する際に大きな意義を持つであろう。イスラムの奴隷制度を考える際に黒人奴隷が占める位置は極めて大きい。そのような包括的な研究を土台にして初めて、マムルークの様な個別的な問題を論じるのに必要な視野を持つことが出来るはずである。

これに関してあえて両者に欠けている点を指摘するならば、ひとつは白人奴隷の実態がほとんど無視されたため、たとえば白人に対する人種偏見やその機能が全く不明であり、この結果両者が黒人奴隷の特徴として論ずる諸点が、本当に黒人という出自に由来するのか、本来奴隷全体に共通する特徴であるのかが曖昧になったことである。白人奴隷に関する同様の研究が待たれるゆえんである。さらにもう一点は、ここに示されるような苛酷な奴隷狩り、奴隷貿易がはたしてイスラム世界に一般的な現象であったかどうかである。佐藤次高氏が『マムルーク』のなかで明らかにしたように、奴隷商人とマムルーク朝のマムルークの関係は、このようなものとは全く異っていた。奴隷が奴隷商人を敬愛し、両者の関係が途切れることなく続くといった状況もまた、イスラム世界に流入する奴隷貿易の忘れてはならない重要な側面なのである。

このように奴隷貿易と黒人奴隷に関しては一定の意義を持つ両書であるが、その執筆の枠組みに関しては納得し難い。ルイスの主張する人種偏見の存在はある意味では自明のことに過ぎず、彼のようにそれを強調し過ぎることは逆に誤った結論を導きかねない。またこのような人種偏見がイスラムの成立に由来するという主張は、我田引水の感を免れず、少なくとも実証性は低いと言えよう。一方ゴードンのアラブ観・イスラム観が極めて粗末なものであり、その論全体に一定の偏りが見られることも上述の通りである。彼の奴隷制度批判そのものが幼稚な道徳論にすぎないが、その延長としてイスラム法を批判する立場は既に客観的な研究者としての域を越えていると言わざるを得ない。

この両者に共通する問題点は、西アジアの社会、歴史上の諸点の全てを「イスラムの特殊性」に帰そうとする思想的背景に由来しているようにおもわれる。奴隷制とは本来歴史的な社会変化のなかで捉えられるものであって、その形態や在り方はまず地域、時代に即した多様なものとして検討されるべきである。そしてそれでもなお、それらに共通するものがあつたとき、初めてその共通性をイスラムの中に位置付けることが可能となろう。「イスラムの奴隷制度」という枠組みはもっと慎重に扱われるべきである。

(Bernard Lewis, *Race and Slavery in the Middle East*, New York, 1990)  
(Murray Gordon, *Slavery in the Arab World*, New York, 1989)